ジャンジャン横丁

大阪には定期的に行っている。朝早くの新幹線に乗り、新大阪から地下鉄で心斎橋へ。そこから歩いて西長堀の大阪市立中央図書館へ。9時15分の開館まで時間があるので、途中でやはり「納豆の朝定食」。

図書館前には多くの人が開館を待ちかまえている。ドアーがあくと、なぜか皆が突っ走る。私もつられてエレベーターまで走る。予約なしの「個室」研究室を確保できると、ほっと一息。大阪関係の新聞や資料をチェックし、足早に図書館を出る。楽しみにしている「場所」があるからだ。

大阪名物「通天閣」界わいである。地下鉄「千日前線」で難波に出て、「御堂筋線」に乗り換え、動物園前で降りる。天王寺動物園に行くわけでなく、その手前にあるジャンジャン横丁から通天閣の手前まで行く。コテコテとした、何とも言えない雰囲気が好きだ。梅田や難波・心斎橋では味わえない、大阪の「味」。

狭いジャンジャン横丁は、人ごみで前に進めないほど。昔ながらの「遊技場」で大声をあげる人。縁日の露店のようだ。囲碁・将棋の店をのぞきこむ人。とにかく外国人を含めて、老若男女が行きかう騒々しい横丁。「ジャンジャン」という言葉がぴったり。

いつも不思議に思うことが。名物の串カツ、たこ焼きさんでも、長い行列ができている店と、ガラガラの店があることだ。二極分化。

ある串かつ店の前には、とくに若い人たちがずらりと並んでいる。ガードマンが整理にあたっている。うしろの方だと、たぶん1時間以上待ちではなかろうか。せっかちな私では、考えられないことだ。若者たちは、待つことに抵抗感があまりないのだろうか。「わたし待つは。いつまでも待―つは」なんて、歌があったような。

今回初めてジャンジャン横丁の入口近くで見かけたのが、ひっそりたたずむ「千成屋珈琲」という店だ。創業1948年ミックスジュース発祥の店という看板が。私が生まれた年の創業の店に、なんだか愛着を感じた。ビールではなく、たまにはミックスジュースを味わうことにするか。

ジャンジャン横丁には、今から40数年前、大学院「浪人」時代に時たま来たことがある。アルバイトでお金が入ると、超激安のお酒を飲んだものだ。そのときは若者ではなく、まるで「おっちゃん横丁」だった。

(2017年9月5日)